

## 12 内積

すでに平面や空間のベクトルについては内積が定義されているが，一般的な（実）ベクトル空間で内積を定義する．内積が定義できるとベクトルの「長さ」が内積を使って定義できる．

### 12.1 内積

定義 12.1  $V$  を（実）ベクトル空間とする． $V$  の任意の 2 元  $u, v$  に対して実数  $(u, v)$  を対応させる対応  $(, )$  が次の条件を満たすとき  $(, )$  は  $V$  の内積という．内積が定義されているベクトル空間は内積空間と呼ばれる．

$$(1) (u + u', v) = (u, v) + (u', v)$$

$$(2) (cu, v) = c(u, v), \text{ ただし } c \in \mathbb{R}.$$

これから  $(0, u) = 0$  が任意の  $V$  のベクトル  $u$  に対して成り立つ．  
なぜなら，

$$(0, u) = (0u, u) = 0(u, u) = 0$$

だから．

$$(3) (v, u) = (u, v).$$

$$(4) u \neq 0 \text{ のとき } (u, u) > 0.$$

例 12.1 (教科書 p.112, 例 1, 例題 6.1.1)

$V = \mathbb{R}^n$  のベクトル

$$\mathbf{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix}, \quad \mathbf{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

に対して

$$(\mathbf{a}, \mathbf{b}) = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \cdots + a_n b_n = \sum_{i=1}^n a_i b_i$$

は  $V = \mathbb{R}^n$  の内積になっている．これを  $\mathbb{R}^n$  の標準内積と呼ぶ．実際，上の (1) ~ (4) の性質を確かめてみよう．

$$\mathbf{u} = \begin{pmatrix} u_1 \\ u_2 \\ \vdots \\ u_n \end{pmatrix}, \mathbf{u}' = \begin{pmatrix} u'_1 \\ u'_2 \\ \vdots \\ u'_n \end{pmatrix}, \mathbf{v} = \begin{pmatrix} v_1 \\ v_2 \\ \vdots \\ v_n \end{pmatrix} \quad \text{と書くことにする.}$$

(1)

$$\begin{aligned} (\mathbf{u} + \mathbf{u}', \mathbf{v}) &= (u_1 + u'_1)v_1 + \cdots + (u_n + u'_n)v_n \\ &= u_1v_1 + \cdots + u_nv_n + u'_1v_1 + \cdots + u'_nv_n \\ &= (\mathbf{u}, \mathbf{v}) + (\mathbf{u}', \mathbf{v}). \end{aligned}$$

$$(2) (c\mathbf{u}, \mathbf{v}) = (cu_1)v_1 + \cdots + (cu_n)v_n = c(u_1v_1 + \cdots + u_nv_n) = c(\mathbf{u}, \mathbf{v}).$$

$$(3) (\mathbf{v}, \mathbf{u}) = v_1u_1 + \cdots + v_nu_n = u_1v_1 + \cdots + u_nv_n = (\mathbf{u}, \mathbf{v}).$$

$$(4) (\mathbf{u}, \mathbf{u}) = u_1^2 + \cdots + u_n^2 \geq 0 \text{ なので, } (\mathbf{u}, \mathbf{u}) = 0 \text{ ならば } u_1 = \cdots = u_n = 0 \text{ となり, } \mathbf{u} = \mathbf{0} \text{ でないといけない. よって } \mathbf{u} \neq \mathbf{0} \text{ ならば } (\mathbf{u}, \mathbf{u}) > 0.$$

## 12.2 ベクトルのノルム

ベクトル空間  $V$  に内積  $(\cdot, \cdot)$  が定義されているとき， $\mathbf{u} \in V$  に対して  $(\mathbf{u}, \mathbf{u}) \geq 0$  だから

$$\|\mathbf{u}\| := \sqrt{(\mathbf{u}, \mathbf{u})}$$

を  $\mathbf{u}$  のノルム または 長さ と呼ぶ．

定理 12.1 (教科書 p.114, 定理 6.1.1)

内積空間のノルム  $\|\cdot\|$  について次が成立．

$$(1) \|c\mathbf{u}\| = |c| \|\mathbf{u}\|.$$

(2)  $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in V$  のとき，シュワルツの不等式：

$$|(\mathbf{u}, \mathbf{v})| \leq \|\mathbf{u}\| \|\mathbf{v}\|$$

が成り立つ．

(3)  $u, v \in V$  のとき , 三角不等式 :

$$\|u + v\| \leq \|u\| + \|v\|$$

が成り立つ .

証明 (1)

$$(cu, cu) = c(u, cu) = c(cu, u) = c^2(u, u)$$

なので , 両辺の平方根をとれば  $\|cu\| = |c| \|u\|$  .

(2)  $u$  または  $v$  が  $0$  に等しければ ,  $(u, v) = 0 = (u, u)(v, v)$  なので , シュワルツの不等式は成り立っている . したがって  $u, v \neq 0$  のときに示せば良い .  $c \in \mathbb{R}$  のとき

$$0 \leq (u + cv, u + cv) = (u, u) + 2c(u, v) + c^2(v, v)$$

右辺は最高次の係数が正の  $c$  の 2 次式なので , これが  $c$  に関係なく成り立っていることより , 判別式は

$$(u, v)^2 \leq (u, u)(v, v)$$

となる . 両辺の平方根をとればシュワルツの不等式が得られる .

(3)

$$\|u + v\|^2 = (u, u) + 2(u, v) + (v, v)^2 = \|u\|^2 + 2(u, v) + \|v\|^2$$

で , シュワルツの不等式より

$$(u, v) \leq \|u\| \|v\|$$

なので , 上式右辺は  $(\|u\| + \|v\|)^2$  以下 . 平方根をとって結論を得る .

□

### 12.3 ベクトルの直交

定義 12.2 内積空間  $V$  の二つのベクトル  $u, v$  が直交するとは

$$(u, v) = 0$$

となることを言う .

直交を使うと新しい 1 次独立性の判定方法が得られる .

定理 12.2 (教科書 p.114, 定理 6.1.2)

内積空間  $V$  の , 零ベクトルでないベクトル  $u_1, \dots, u_r$  が互いに直交するならばこれらは 1 次独立である .

証明

$$c_1 u_1 + \dots + c_r u_r = \mathbf{0}$$

とする . このとき , 勝手な  $1 \leq j \leq r$  をとって  $u_j$  と上の式の内積をとると直交性より

$$c_j(u_j, u_j) = 0$$

を得る .  $u_j \neq \mathbf{0}$  なので , これは  $c_j = 0$  を意味 .  $j$  は勝手に選んだので , これは  $u_1, \dots, u_r$  が 1 次独立であることを示している .  $\square$

練習 12.1  $\mathbb{R}^3$  のベクトル

$$\begin{pmatrix} 1 \\ a \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ -2 \\ a \end{pmatrix}$$

が ( $\mathbb{R}^3$  の標準内積で) 直交するように  $a$  を求めよ .